■さろん（VISION Vol. 26, No. 1, 10–12, 2014）

スタンフォード便り(2)研究生活編

竹村 浩昌*,**

* Postdoctoral Fellow, Department of Psychology, Stanford University
** 日本学術振興会 海外特別研究員

Stanford大学の竹村です．前回は生活環境について書きましたが，今回はラボでの毎日について書き留めることにします．

1. ラボでの日常

朝9時半か10時ごろになると，マグカップを持ったボスのBrian（Wandell教授）が，院生やポスドクのいる部屋に現れて，“Coffee?”と言います．ラボマネージャー，ポスドク，院生などの一団が，マグカップを持って，Brianの後についていきます．この習慣は，“Morning Coffee Train”と呼ばれています．向かう先は，ラボから歩いて5分ぐらいのところにあるBytes Caféという学内のカフェになります．自分でマグカップを持って行けば，コーヒーは$1とお手頃な値段．とは言っても，ラボに居るイタリア人とイスラエル人のポスドクは，「コーヒーはエスプレッソでないと飲めない」「トルココーヒーじゃないとダメだ」と主張しアメリカンコーヒーを決して注文せず，文化の多様性を垣間みることもできます．ラボからBytesまで行って帰ってくる間に，世間話や，グラントや学会などの研究関係の話，研究の進行状況や，最近見つけた面白い論文，などの話をします．ラボメンバーとBrianがコミュニケーションを取る貴重な時間です．

ラボに戻って自分のオフィスに戻り，コーヒーを飲むと，「さあ今日も仕事するか」というスイッチが入ります．毎日の研究はこうして始まります．だいたい，12時ぐらいまで研究するとランチタイムになりますが，Stanfordはキャンパス内の食事がさほど充実しておらず，割高で，ダウンタウンに行くにも距離があるため，自分でお弁当を持ってくる人が多いです．ラボメンバーは世界各国から来ていますので，みんなでお弁当を持ち寄って食べると，世界各国の多種多様なお弁当を見ることができます．私はだいたい，肉じゃがやカレー，筑前煮，ホワイトシチューなどを夜に料理して，残ったものをご飯やパンと一緒に持って来ていることが多いです．お昼ご飯を食べたら，午後の研究時間に入ります．

「アメリカの研究者は早く帰る」と良く耳にしたことがあります．一般論としては正しいのでしょうが，Stanfordで僕の周りにいる研究者は，比較的遅くまで研究している人が多いと思います．夜中は大変暗くなってしまうので，9時や10時まで働いているような人は見ませんが，家に帰ってからも研究に関することをしている人が多いという印象があります．勤勉さと言う意味では，あまり日本と大きな違いを感じることはありません．一方で，「家族に関することは優先されるべき」という考えが共有されており，小さな子供がいる人は，早く帰るというのを遵守していると思います．私のオフィスメートのイスラエルから来ているポスドクは，小さい子供がおり，誰よりも早く来て，誰よりも早く帰るように意識的に努力しているようです．

夜にみんなで集まることはなく，夜は家にいるもの，という人が多い印象があります．社交的な場としてのパーティーは，土日のお昼ぐらいに始まって，日が落ちるぐらいの頃には終わることが多いです．人によって家族形態が違うので，いろいろな人が参加しやすい時間にやる，という配慮がなされていると思います．と

は言え大学院生などの若い層は，時々連れ立って夜に遊びに行くこともあります．私は同じぐらいの歳の大学院生達と遊びに行くことがままあり，この間は卓球パーティーを主催して楽しい時間を過ごしました．

2. セミナー

日によっては，セミナーが入ることがあります．月曜の朝はラボミーティングで，ラボメンバーのProgress Reportや，学会などの発表練習の場に使われています．水曜日のお昼休みには，だいたい隔週ぐらいの頻度でVision Lunchという，視覚関連の研究室（主にWandell, Norcia，Grill-Spectorラボ）の合同セミナーが行われ，Stanford学内，学外のスピーカーが研究発表をしてみんなで議論をします．金曜の午後には，Friday Seminarといって，Department of Psychologyの院生やポスドクが持ち回りでやるセミナーがあります．Vision Lunchは視覚を専門とする研究者の中で議論する会であるのに対し，Friday Seminarはどちらかというと，少し違う分野の人に対して発表するスキルを磨く場，という位置づけでしょうか．先日，私もFriday Seminarでトークをしたところですが，記憶や学習，運動制御などを普段研究している研究者に熱心に聞いてもらえました．そのほかにも，StanfordのNeurosciene Programが主催する各種セミナーがあり，こうしたセミナーでは大物の研究者どうしの議論を直接目にすることができて面白いです．

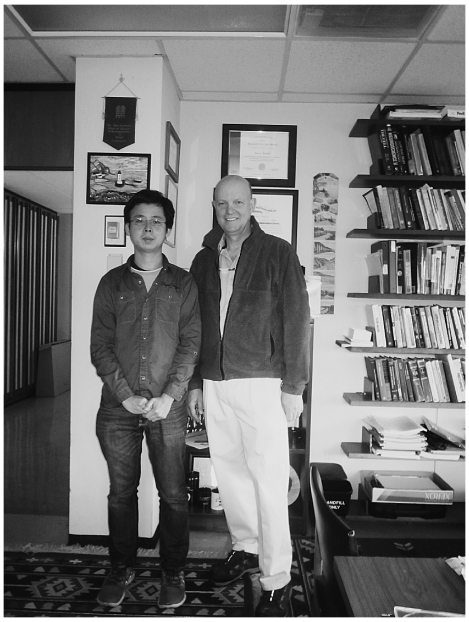

写真　筆者（左）とBrian Wandell教授（右）．

とは言え，来てすぐの頃は，なかなかセミナーに入って行くのも大変だった思い出があります．最初に問題になるのはリスニングです．みんなが話していること，質問していることに耳がついていかず，最初のうちは議論についていくのが大変だった思い出があります．とはいえ，これは純粋に英語の問題ばかりではなく，自分にとってまだ親しみのないMRIの専門用語など，アカデミックな知識の欠落による部分もかなり多いと思います．半年ぐらい一生懸命みんなの議論を聞いて，研究も真面目に取り組んでいれば，次第にみんなが何を話しているのかフォローするのに困難は感じなくなるでしょう．

ただ次に問題になるのが，発言して議論に参加することです．良い質問を思いついて，それを英語で話すことができたとしても，グループ場面での会話をさえぎって，自分が発言するのは，最初のうちはなかなか大変です．これは，英語力の問題というより，会話の「間」の取り方に適応できていないことが原因ではないかと思います．日本での日本人どうしの議論と，Stanfordでの議論は，何とも言えない発言のテンポや間の取り方の違いがあって，最初はタイミングが取れずに発言できないことが多々ありました．グループ場面での議論に満足に参加できるようになったと思った時には，もう渡米から一年ぐらい経過していたかもしれません．

ただ，一度議論の仕方に適応すると，サイエンスが圧倒的に楽しくなるのは間違いないです．特に，一流の研究者が来るようなセミナーで発言し，議論に参加することで，自分自身の考えが深まるという経験は，お金では測れないような価値があると思います．一度質問し，議

論できるようになると，セミナーの後で自分のことをつかまえてくれる人がいて，「お前の質問は良かったよ」とか，「いい質問だと思うけど，僕はこう思う」とか，そういった形でいろいろな人と議論がさらに深まって，得るものはさらに多くなってきます．セミナーが終わった後に，Brianや，ラボメンバーと話して，みんながどう思うかそれぞれの印象を聞くと，「この人はこういう風に考えるのか」とか，「こういう見方もあるのか」といった形で，自分の視野の広がる体験をすることが多いです．セミナーに出ることで得られる部分だけでなく，その後に行うラボメンバーどうしの議論も得るものが非常に多いかもしれません．

Job Talkと言われる，Faculty候補者の行う研究発表が行われることがあります．Job Talkは独特の緊張感があり，そこで行われる議論は真剣勝負そのもので，若手研究者の本気のプレゼンテーションを見ることができます．そういったJob Talkを見て，実際に議論に加わることで得るものも多いです．

とは言え，Stanfordはトークが大変多く，日によっては一日に3回も関連分野のトークがあることがあります．全部出ていると，自分の研究をする時間がなくなってしまいますので，取捨選択しなければならないのが贅沢な悩みです．

今回は普段のラボでの生活にフォーカスしましたが，次回はもう少し，普段どういったことをラボメンバーで議論するかなど，やや具体的なサイエンスの中身について書くことができればと思います．

2013年11月21日

竹村　浩昌
htakemur@stanford.edu